

オジェゴフ辞典関連研究(2)

甘粕, 和子 / 吉田, 衆一

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編 / 法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編

(巻 / Volume)

122

(開始ページ / Start Page)

87

(終了ページ / End Page)

102

(発行年 / Year)

2003-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004783>

「研究ノート」

オジェゴフ辞典関連研究（2）

吉田 衆一・甘粕 和子

今回は、一卷ものの規範的語義辞典「オジェゴフ辞典」が、外来語収録の面で、ロシア・ソヴィエト初の規範的語義辞典「ウシャコフ辞典」をどのように引き継いだかについて調べてみる。

はじめに、ソヴィエト時代初期の、ロシア語における外来語の状況に触れておきたい。

А.М.Селищев⁽¹⁾によれば、革命期はじめの頃は、出版の言語は、労働者にも理解し易いことばであった。解かりにくい外来語は、カッコ内に意味上近いロシア語の単語で説明されていた。その後、若干の中央出版諸機関の言語は、古い、重々しい、公式的な調子に後戻りしている。必要もないのに使われる外来語が、指導的、綱領的な条文に散りばめられることがしばしばであった。1924年当時のイズベスチヤ紙なども、この点で際立っていた。ソヴィエト政権が、従来通りの生活様式や交流形体を保つヨーロッパ諸国家と交流するようになったことは、中央のソヴィエト公式刊行物の言語にも、ソヴィエト政府の代表者たちのことばにも反映した。一方、革命活動家の中には、ロシア共通の標準的な(литературная)ことばを充分身に付けていない人々が少なからずいた。そこで、正しい読み書きと文化を目指す運動は、労働者の先頭を行く人々のための、ロシア語のあらゆる豊かさ、しなやかさ、繊細さを身に付ける運動を意味し、このための第一の条件が、外国語の不正確な単語や表現を、生きた日常的なことばから追放するキャンペーンともなった⁽²⁾。レーニンのメモ“ロシア語の浄化について”がブラウダ紙上に発表されたのも、1924年であった(実際にレーニンが書いたのは、1919年か20年であったが)。これを、広い意味でとらえたウシャコフの反応をめぐる経緯は、前稿に述べた通りである。

1) 外来語、およびその収録に対するオジェゴフの考え方

オジェゴフ辞典の初版が出版されたのは1949年、彼が幾つかの論文を発表したのは、殆どが1951年以降であった。

“Основные черты развития рус. языка в советскую эпоху” (Известия АН СССР, ОЛЯ. 1951, вып. 1)、“К вопросу об изменениях словарного состава рус. языка в советскую эпоху” (Вопросы языкознания. 1953, №2) および “Вопросы лексикологии и лексикографии” (Труды П. АН Латвийской ССР, Рига 1953) の中で幾らか外来語に触れている。当時猛威を振っていたマル派のアラクチュエーフ体制に一応の終止符を打ったスターリンのいわゆる“言語学理論”がプラウダ紙上に発表されたのは1950年6月であった¹³⁾。オジェゴフの上記の論文は、いずれも、当然、スターリンの言語学理論を踏まえ、これを随所に引用して、ブルジョア・貴族の俗語、その日常習慣に関連のある多くの外来語を含む語彙層は、消え去る運命にあることを、具体的に、特に強調している。

これらオジェゴフ論文のうち、“Вопросы лексикологии и лексикографии”には、さらに、つぎのような記述がある：

「辞典編纂の作業にとって重要な、語彙学の緊急課題の一つとなっているのは、借用語問題の解決である。この語彙の特徴は、一般共通語、地域方言の領域における借用か、あるいは社会的俗語 (социальные жаргоны) の領域で借用されたものか、話しことばの領域で借用されたものかあるいは標準的・書きことばの領域における借用かということと密接なつながりがある。例えば、ロシア語では、キエフ・ロシア時代にギリシャ語から文書のかたちで一般共通ロシア語に浸透した単語の意味上の種類 (семантические классы) と、中世紀に話しことばによる交流の過程でチュルク諸語からロシアの一般共通語に浸透した単語の意味上の種類は、著しく異なっている。古典諸語—ラテン語およびギリシャ語—を基礎に形成された語彙は、一般共通ロシア語の中で特別な地位を占めている。18世紀および19世紀には、この語彙は、国際的な性格を持つ用語の発展の独特な源泉であった。一方、フランス語から入って来て18～19世紀の貴族俗語となった借用語彙は、別な運命を辿った。これらの語彙は、多くは一般共通ロシア語には入らず、また、言語の中に侵入したその若干の要素も、現代までは殆ど残されていない。借用語彙の分野に、しっかりした方法論的基盤に基づく研究がなく、そのために、わが国の語義辞典は、外来語によって極度に汚染されてきた。語義 (規範的) 辞典では、さまざまな種類の外来語が、一般共通語におけるその歴史的役割と意義に基づいて選択されるべきである。」

これは、規範辞典の外来語収録におけるオジェゴフの基準であろうが、これについても、また、上記の“極度の汚染”についても、具体的に切り込んで

いない。

これらの後1955年に発表された“Очередные вопросы культуры речи”(Вопросы культуры речи. 1955, вып. 1)の中では、下記の通り、ロシア語における外来語の状況を分析し、研究の必要性を訴えている。

「正しい語用法は、ことばの文化の重要な問題の一つである言語の純粋さ、外来語使用の限界の問題と直結している。夥しい数の外来語、主として、用語が、ロシア語に導入され、消化され、一般に使われるようになったのは周知の通りである。また、コミュニケーション上欠くべからざる要求が全くないような、しばしば、考えを的確に表現するには必要としないような外来語が、ロシア標準語発展の過程を通じて、現れたり、消えたり、存在していたりすることも、よく知られている。

まず第一に、それは、貴族・ブルジョアの、その後、より広く、インテリの日常のことばからロシア語に浸透した非専門的な語彙である。彼らのことばは、文法的にロシア語化された外来語に充ちていた。それらがロシア語に存在した主な原因の一つは、ロシア語の中に、主としてフランスの単語を広く採り入れていた—これらの単語は、後に文法的にロシア語化された形をとっていた—ロシア貴族のバイリンガルであった。.....これらの語彙層は、現実のさまざまな意味的ニュアンスを必ずしも反映しないまま、広く標準語的に使われるようになって、ロシア語彙の同義語的な、より正確に言えば、意味の上で全く同じロシアの語彙を補充していった。これらを使うことで、よりの確になるわけでも、表現性が大きくなるわけでもないのに、ことばに“博識”、“教養”のニュアンスを添えていた。多くのこのような単語は、現代とは無縁な貴族的な、革命前の語用法の痕跡を止めていたために、現代語から脱落した。しかし、例えば доминировать, апробировать, апеллировать к чему-нибудь, акклиматизироваться (人間に対して), акцентировать (転義で), экипировать, элиминировать, превалировать, импозантный, экстравагантный, эксцентрический (転義で), апелт, антураж, амикошонство(いずれもオジェゴフ初版に収録、антуражだけустар.の表記も持つ。なお、上記のうちамикошонствоとантуражの2語はシヴエードワの書評の中で指摘され、2版では、削除された)等のような、社会的にニュートラルな単語は、残っている。これらはすべて、主として古い世代の人々のことばに残っているが、ことばを美しくする役には立っていない。この非専門的語の使い方を指摘して、レーニンは、その有名なメモ“ロシア語の浄化について”の中に、“ロシア語を、われわれ

は駄目になっている。必要もないのに外来語を使っている。それらを誤った使い方をしている。…”と書いている。この種の外来語彙使用の規範問題を合理的に解決するため、現代ロシア語の語彙 (словарный состав) におけるそれらの意味上の価値を研究する必要がある。

専門的な語彙が、比較的ゆっくりとした足取りで一般に使われるようになっていった時代は、疾うに過ぎ去った。もはや、ソヴィエト時代には、そのような状況ではなく、従って、専門用語を、不必要な、正当化されていない、人々が殆ど理解していない外来語的な要素から解放しようとの要求が極めて切実になったことが判る。“文学新聞”(1950.1.4)は、つぎのような記事を載せている：“幾千の外来の単語、専門的な用語や名称が、医学文献を汚し、それらの文献の利用を極端に難しくしている。опухольの代わりにтуморと書かれ、ощупывание(患者を診察する時)の代わりにпальпация、выделяемая слюнаの代わりにсецернируемая слюна、всасываниеの代わりにрезорбция(тумор, пальпация, сецернируемая слюнаは、オジェゴフ初版、2版とも勿論収録していない)等々と書かれている”。外来語的な要素の使い方を整理し、それらの中の幾つかから用語を理性的、合理的に浄化することは、ことばの文化向上のための緊急課題の一つである。(外来借用語の問題は、ロシア語だけではなく、ソ連邦のロシア語以外の諸標準語にとっても重要であるがために、なおさら、外来語使用規範化の原則は作製する必要がある。)」

これは、初版と2版における経験から、古い世代の人々の中に残っている非専門的な外来語と、とりわけ、科学・技術系の専門的外来語の使い方の難しさに直面しての提起であろう¹⁹⁾。いずれも、不必要な外来語は使うべきではないとのニュアンスは強い。

2) オジェゴフ辞典における外来語の収録

初版(1949年)「使用の手引き」の“外国に由来する単語”の項で、オジェゴフは次のように解説・説明している：

「他の諸民族との幾世紀にも亘る交流の過程で、ロシア標準語は、新しい概念を伝達するために外国由来の単語を採り入れて来た。現代の言語には、主としてギリシャおよびチュルク起源の単語が古い時代から、また、もっと後の時代からは、ラテンおよび新しい西欧語からの単語が保持されている。ソヴィエト時代の借用は僅かで、主として、新しい国際的用語である。

さらに、借用されたのではなく、ロシア語の土壌の中で、語根、接尾辞または接頭辞の助けによって、かつての借用語から形成された、特に学術的および技術的な多くの用語（例えば、метраж）がある。また、ロシア語と外国語の形態学的要素を組み合わせで作られた単語（例えば、военизация, листаж）もある。このように外来語および外来語の要素を持った単語は、その由来が極めて多様である。これらの単語は、ロシア語における使い方も一様ではない。

借用語そのものの大多数は、ロシア語の文法形式（ロシア語の接尾辞や語尾、性、動詞変化、格変化など）を採り入れた。多くの単語は、ロシア語の土壌で、新たな意味的ニュアンスを得て、ロシア語独特の概念を表わすようになった。多くの単語が、人々に広く使われ定着したため、これに替わるべきロシア語起源の同じ意味の単語を持たない。

語源学を使命とはせず、現代的な使い方の規範だけの提供に努める本辞典は、語源学的情報、即ち、既にロシア語の中に定着しロシアの語彙で替えられなくなった単語の起源に関する情報は提供していない。由来を指摘してあるのは、主として、形態学上の形による外来語（例えば、коммунике, ревю（共に фр.、2 版では前者に офиц. の表記））、一般的な日常生活には広く浸透していない科学・技術用語（例えば、абберация, прерогатива, релятивизм, реактив, регенерация（いずれも лат. うち、абберация, реактив, регенерация には спец. の表記が付き、また、2 版では、абберация は спец. が除かれて прерогатива とともに книж. の表記が付き、その他の спец. は初版と同じ））、異国の生活習慣やイデオロギーの概念を表わす単語（例えば、аббат, прелат（両者とも лат.）、епископ（гр. この語に語群配置された епископальный には спец. の表記付き））、同等のロシア語に替えることができ、必要がなければ使うべきではない非専門的文章語（例えば、презент（фр. устар.）、превалировать（лат.））である。...」

外来起源の情報提示は、スペース節約の上からも当然、ウシャコフ辞典に比べて、大きく簡略化され、由来する言語の表記だけに止めている。これは、一卷ものの規範辞典としては、極めて妥当で、外来語収録に対するオジェゴフの姿勢も、ウシャコフの寛容さとは勿論異なるが、一卷ものの辞典としては当然なニュートラルなものとも見ることができる。しかし、例えば、абстракция, автобиография, ателье に外来語表記が付いているのに、абсурд, амуниция, аналогия 等々が外来語表記を持たないというように、ロシア語に定着し、ロシアの語彙で替えられない外来語に外来表記を付けないとの条件は、多くの不統一を生んでいる。また、同等のロシア語に替えることができ、必要がなけれ

ば使うべきではない非専門的文章語や、一般的な日常生活には広く浸透していない科学・技術用語でも場合によっては、由来を指摘した上で収録されていることを、この使用の手引きは示している。なお、それらの単語には、устар.や спец.の表記を伴うものもあるが、概して特段の指示はない。このように、オジェゴフの外来語表記システムは、矛盾を含んでいる。

2版(1952年)では、この項を“単語の由来について”と変え、「現代の語用法の規範だけを提供すべく努めている」として、単語の起源に関する情報の提供を一切やめてしまった(これについて、後年、シヴェードワが、オジェゴフは、その専門ではなく、古い借用語、新しい借用語の語源に詳しい語源専門家を必要としたから、と語っている)。そのほかの説明には、あまり大きな相異はないが、「…狭い領域だけで使われたり、専門的用語、文章のスタイルなどを特色とする単語もある。すべてこれらの単語には、然るべき表記や、使用の領域を示す特別な説明が付けられている。外来起源のすべての同様な単語は、とりわけ、同等のロシア語で替え得る場合、必要もなく使うべきではない」と述べ、やはり、そのような単語の収録もあることを示しているが、禁止のニュアンスは強まっている。また、序文の中でも「外来起源の単語のうち、古くなって、最近ロシアの用語に置き換えられた単語は削除された」とある。これ以降の各版にも、同等のロシア語で替え得るような外来語を必要もなく使うべきではない、との文言は、引き続き記載され、1989年に出版された21版で、初めて除かれた。

3) ウシャコフ辞典とオジェゴフ辞典初版の比較

ウシャコフ辞典は、その序文にも述べてある通り、「基本的な部分は、プーシキンからゴーリキーまでのわが国の古典文学からのことば、19世紀中に形成され、一般に使われるようになった科学的、実務的、および文章語のことば」で、「その中には普遍的に使われるようになった新しい単語も含まれている」。これについては、後に、論文“Советские словари”(Советская книга. 1946, №10-11)の中で、オジェゴフも「(ウシャコフ辞典には)プーシキン時代以降に形成された古典ロシア文学語(классический литературный язык)の基本的語彙が、できる限り完全に収録されている」と書いている。一方オジェゴフ辞典は、既に初版序文に「標準的(литературный)ロシア語の、ソヴィエト時代にでき上がった規範の確認を基本的課題とする」と述べて、語彙収録の時代的範囲が

異なることを明記している。また、ウシャコフ辞典は中辞典に該当し、オジェゴフ辞典は共時性をより厳しく追求する小辞典である。このことは、外来語の収録にも関連して、数量的に削減されたのは当然である。では、どのような外来語が削除されたのだろうか？

1954年版外来語辞典からも（これ以前の版は入手できなかった）、外来語数の率が高いのが、A, K, Ф, Цの項であることを確認し、それらをはじめ、語数の多い次の各項を使って比較してみた。

A項：

ウシャコフ辞典には収録されているが、オジェゴフ初版には収録されていない外来語の数（便宜上これをaとする）—78語；（2版—さらに45語削減）＊カッコ内の数字は2版における削減数

うち、ギリシャ語表記付き—22、(27) アラブ語表記—5、

ラテン語表記—15、(7) ドイツ語表記—2

フランス語表記—23、(8) その他

ウシャコフ辞典になく、オジェゴフ辞典には収録されている外来語（便宜上これをbとする）—12語。（аванпорт - фр., авитаминоз - спец., автокар - анг., автоклав - гр.-лат., автомотриса - фр., автострада - гр. ит., адаптер - лат., акын - тюрк., аммонал - гр., анофелес - гр., антоним - гр., ашуг - тюрк.）；

Б項： a — 63語；

в — 8語（барраж - фр., бекон - анг., бильдаппарат - нем., бином - лат.гр., боксит - фр.соб., бормашина - нем., бридж - анг., бриджи - анг.）

Г項： a — 68語

в — 5語（гангстрел - анг., гелий - гр., гетто - ит., гидропульт - гр.-лат., грейдер - анг.）

Д項： a — 67語

в — 7語（дегазация, дегазатор - фр., демаркация - фр., демарш - фр., демилитаризовать - лат., демонтировать - фр.ここにデモンタージュが表記なしで語群配置, дещиметр - гр., диверсант但しдиверсияの派生語、диверсияは、両辞典とも収録し、ウシャコフ辞典にはфр.の表記があるが、オジェゴフ辞典には外来表記なし）

И項： а — 38語

в — なし。

К項： а — 146語（2版で、さらに57語削減）

うち、ギリシャ語表記—13、(8) ポーランド語表記—6、
ラテン語表記—31、(15) イタリア語表記—4、(6)
フランス語表記—21、(11) その他
ドイツ語表記—24、(7)

в — 2語 (кафетерий - исп., коллаборационист - фр.)

(なお、初版で削除されたが、2版で復活した語—контаминация-
ウシャコフ辞典でлат.の表記)

Л項： а — 38語

в — なし。

М項： а — 109語（2版で、さらに20語削減）

うち、ギリシャ語表記—22、(9) イタリア語表記—8、(2)
ラテン語表記—18、(3) ドイツ語表記—4、
フランス語表記—28、(4) その他

в — なし。

П項： а — 166語

うち、ギリシャ語表記—52、 ドイツ語表記—7、
ラテン語表記—28、 イタリア語表記—3、
フランス語表記—36、 ポーランド語表記—3、他。

в — 1語 (преамбула - фр.)

Р項： а — 94語

в — 1語 (реконверсия - лат.)

С項： а — 155語

うち、ギリシャ語表記—38、 英語表記—15、
ラテン語表記—29、 イタリア語表記—8、
フランス語表記—12、 チュルク語表記—4、その他

в — 1語 (сантименты - фр.)

Т項： а — 114語（2版でさらに15語削減）

うち、ギリシャ語表記—42、(3) チュルク語表記—7、(2)
ラテン語表記—18、(3) イタリア語表記—6、

フランス語表記—16、(5) ドイツ語表記—4、
英語表記—9、(2) その他

в — 1語 (турнэ - фр.)

Φ項： а — 105語 (2版でさらに20語削減)

うち、ギリシャ語表記—31、(7) ドイツ語表記—22、(1)
ラテン語表記—17、(5) 英語表記—7、(1)
フランス語表記—11、(4) オランダ語表記—6、(2)
その他

в — なし

Ω項： а — 85語 (2版でさらに17語削減)

うち、ギリシャ語表記—41、(10) 英語表記—3、
ラテン語表記—25、(3) その他
フランス語表記—13、(1)

в — なし

以上、発音によって外来語の分布にはばらつきがあるが、オジェゴフ初版で削除された外来語の大多数はギリシャ語、ラテン語由来の表記を持つ単語であることが判る。それらの単語の内容は、自然科学、人文科学、歴史、演劇、文学と、広くあらゆる分野に亘り、オジェゴフが上記の論文でも触れているように、国際的な特色を持つ。それらの多くは、例えば、амплификация, кинология, конгруенция, миокардий等のように、小型を必須条件とする当時の大衆辞典には必ずしも収録を要しないような単語である。なお、削除されたギリシャ語系外来語のうち、教会・宗教関係の単語は、意外に少数である。例えば、宗教関連のギリシャ語系外来語が比較的多いA項：15語ほどのそれらの単語中削除されたのは2語、I項：15語中2語、E項：10語中1語⁽⁵⁾だけであった。

削除された外来語のうち、つぎに多いのがフランス語由来の単語で、この中には、ギリシャ、ラテン語由来の単語のように学術的な分野のものは殆ど見当たらず、社会、日常生活に関連する単語が多い。“ブルジョア・貴族社会で”との但し書きが付くのは殆どがフランス語由来の単語に限られ、また、“устар.”の表記を持つものの数も、フランス語表記の外来語に圧倒的に多い。削除されたフランス語由来の単語の中に占めるそのような単語の割合は、例えば、フランス語表記の削除語数の率が高い、M項でмарьяж, матине, мерси, моветон, мусье等、その削除率は3割足らず、П項(парвеню, пардон,

патронесса, пециньерка等)とC項(соника, семпель, сюркуп等)で約5割に及ぶ。

初版の収録語彙総数が50100語、2版は51533語で、約1400語増えているにも拘らず、外来語はさらに削減されている。しかし、ブルジョア・貴族の俗語、その日常習慣に関連のあるフランス語系の語彙層は、スターリンの言語理論発表以前に刊行された初版で既に多くが削除され、初版後3年という当時としては異例の速さで出された改訂の2版で俄かに削除された訳ではなかった。従って、1951年以降に発表された規範的小辞典における外来語収録についてのオージェゴフのこの考え方は、すでに初版から反映されていたことになる。

新たに収録された外来語は、上記に見る限りでは、フランス語由来が最も多く、ついでギリシャ語、ラテン語、英語由来の順で、その分野はさまざまである。なお、外来語に数えられてはいないが、外来の語根と接頭部分や接尾部分を接合した主として技術分野の合成語(例えば、агробиология, аэронавигацияいずれも2版)が、初版、2版にはさらに数多く現われ始めている。また、ウシャコフ、オージェゴフ両辞典とも、接頭部分、例えばавто-, аэро-(ウシャコフ、オージェゴフともгр.の表記)、агро-(オージェゴフはгр.、ウシャコフはново.を表記)、кино-等をセミ見出し語として採り上げ、それぞれのもとに、見出し語としては収録されていない合成新語を、時代の要求に従って多数例示している。

以上は、外来語の収録語数の変動についての観察だが、削除されていない外来語で、語義の表現には、どのような変化が見られるだろうか? 比較的身近な単語を幾つか比較してみる。用例は、象徴的なものを除いては省略する。

まず、ギリシャ語系外来語には、教会関係、日常生活用品、ヨーロッパ共通文化に関するものが多く、ラテン語系では、科学・技術的、芸術的、社会的な概念に係わる語彙が多い。フランス語由来の外来語は、貴族上流階級に使われた日常的な語彙のほかに、新しい雑階級インテリの間に浸透した政治的用語も多い。ドイツ語系借用語は、製造業、商業、軍事等々さまざまな分野に亘る。イタリア語系は、音楽関係の単語が圧倒的に多い。

ギリシャ語由来の外来語例(以下、Y=ウシャコフ辞典、O-I=オージェゴフ辞典初版を指す)

“евангелие”—Y: 1. Часть библии, состоящая из четырех книг, важнейшая в христианском вероучении. 2. перен. Основное произведение, содержащее изложение какого-н. учения.; O-I: Часть библии, содержащая повествование о жизни и учении Христа.

“парус”, “фонарь”等日常生活用品では、オジェゴフ辞典には外来表記の付かないものが多い。また、これらのように文学作品との係わりの深い単語に、ウシャコフ辞典は、レールモントフ、プーシキン等の作品を多数引用している。

“оптика”, “склероз”等々は、両辞典の語義説明が殆ど同一。

ラテン語由来の外来語例ー

“концепция”—У: Замысел, теоретическое построение; то или иное понимание чего-н.; О-1: Система взглядов на что-н., основная мысль чего-н.

“пролетарий”—У: 1. Лишенный средств производства наемный рабочий в капиталистическом обществе. スターリンに関する引用文、共産党宣言からの引用文。2. В древнем Риме - не принадлежащий к рабам бедняк, неимущий человек.; О-1: 外来表記なし。Наемный рабочий в капиталистическом обществе。

“трактор”—У: Автомашинна для буксировки прицепных повозок или для тяги сельскохозяйственных и других орудий.; О-1: Самоходный двигатель для тяги сельскохозяйственных и иных орудий。

フランス語由来の外来語例ー

“шик”—У: То, что является признаком лучшего тона, высших достоинств (в поведении, в каких-н. явлениях); шегольство, блеск, роскошь. ツルゲーネフ、サルトル・ウイコフ・シチェドリソンの引用文; О-1: Показная роскошь, шегольство。

“мадам”—У: 1. Слово, присоединяемое к фамилии замужних женщин аристократич., буржуазного круга в знач. госпожа(дореволюц.). Слово, употр. при вежливом обращении к такой женщине; в знач. сударыня(дореволюц.). 2. Начальница женского института (разг. дореволюц.). 3. Гувернантка, воспитательница-иностранка в барском доме (старин.). プーシキンからの引用文。4. Хозяйка модного магазина, модная портниха(старин.); О-1: 1. Обращение к замужней женщине во Франции и некоторых др. странах, госпожа。2. Воспитательница-иностранка в богатой семье(устар.).

“саботаж”—У: 1. Умышленно-недобросовестное исполнение обязанностей, уклонение от работы или злостный срыв работы при соблюдении

видимости выполнения ее. 共産党史などからの幾つかの引用文。
 2. Стремление помешать осуществлению чего-н. при помощи скрытого, замаскированного противодействия.; О-1: Злостное, преднамеренное расстройство или срыв работы при соблюдении видимости выполнения ее, скрытое противодействие исполнению, осуществлению чего-н.

“атака”, “батарея”, “манеж”等々のさまざまな軍事関係用語は、オジェゴフ辞典で外来表記の付かないものが数多い。

以上、当然ながら、まず目に付くのは、オジェゴフ辞典が、簡潔でより短い表現を使っていること。これは、勿論、外来語に限らぬ全般的な傾向である。つぎに、内容そのものの変化は別として、大まかに言えば、宗教関係、社会・政治的用語、貴族上流階級に関連のある語彙で、語義説明の表現にそれなりの工夫が窺えることである。これも、外来語である以前に、その領域に左右されると見ることができ、やはり、規範辞典が荷う、時代の教育的使命に係わると考えられる。

4) 言語・辞典学界における当時の状況とオジェゴフ辞典

1930年代以降、言語・辞典学界を席卷したマル主義に大きく影響されたレニングラードのアカデミー辞典派と、アカデミーの枠外にあったウシャコフのモスクワ辞典派との対立については、これまでも触れたが、オジェゴフ生誕百年を機に明らかにされたオジェゴフのメモや書簡等々から、その様子が具体的に窺えるようになった。

オジェゴフが、メモ“マルの誤りについて”の中で述べているように「ウシャコフの“語義辞典”は、マル主義の作用から孤立していた。そのために、マル主義者の側から、多くの迫害を受けた」。ヴィノグラードフ、トマシェフスキー、ラーリンが、ウシャコフ辞典の編集に参加したのは、主として第1巻だけであった。ウシャコフとヴィノクルは、モスクワに在って作業を続けていた。1935年にウシャコフ辞典第1巻が出版されると、マル派の攻撃はこれに集中し、レニングラードで編集に携わるオジェゴフは(この頃第2巻の作業を終えたところであった)、1936年にモスクワに移るまで⁹⁾、その猛攻にじかにさらされる形となった。

第1巻発行後間もなく催された、レニングラードの言語・思考研究所における討論(1935年12月11日および23日)の雰囲気、オジェゴフは、モスクワの

ウシャコフにつぶさに訴えている⁽⁷⁾。マル主義者たちによるウシャコフ辞典攻撃の主な論点は、政治的に先鋭でない、なまぬるい、階級闘争が後退している、というようなものであった。彼らの攻撃に対し、この辞典をはっきりと擁護したのはトマシェフスキーとラーリンだけであった。オブノルスキーやイストリナは、攻撃のあまりの横暴さに眉をひそめながらも、ウシャコフ辞典を擁護しようとはしていない。シシエルバも、オブノルスキー、イストリナも、この時はまだ、アカデミーロシア語辞典の編纂に携わっていた。やがて、シシエルバとオブノルスキーは、辞典の作業を罷免され、その後イストリナも、辞典の仕事を退くことになる。罷免を免れたチェルヌイショフは、マル主義者たちの支配下で作業を続けることとなった。チェルヌイショフは、ウシャコフ辞典の完成後、詳細にウシャコフ辞典を書評している。ウシャコフ辞典の価値は評価しながらも、感情的とも見えるその激しい筆致は、前稿記載の、ウシャコフ辞典に対する外来語収録批判に見る通りである⁽⁸⁾。オジェゴフは、その新しい辞典の外来語収録に当たって、この批判を注意深く吟味したと思われる（前稿6～9頁参照）。

オジェゴフは、さらに、初版に対する書評や批判（Н.Ю.Шведова: “Рецензия. Словарь рус. языка. С.И.Ожегова”. Сов. книга.1949,№10; Н.Родионов: “Об одном неудачном словаре”. Культура и жизнь. 1950.6.11)にも応えて、慎重に対処している。

このうち、ロジオーノフの書評は、“Об одном неудачном словаре”というその標題からも想像されるように、中傷的な、質的にも低いものであったが—外来語の収録にも触れている—、时期的に、プラウダ紙上でスターリンの言語学論争が進められている最中のことで、注目を惹いたとみえる。ロジオーノフの書評を掲載した“Культура и жизнь”紙は、1950年8月31日付け同紙のこれに対応する欄に、つぎのような文を載せている：「ソ連邦閣僚会議付属印刷業、出版所ならびに書籍販売事業総局長は、総局指令で、“Культура и жизнь”紙が正当に指摘した深刻な誤りが、ロシア語辞典（オジェゴフ編集）の中にあったことを指摘した。辞典を修正し、辞典に存在する欠点を除き、辞典の改訂原稿を学術機関ならびに読者の間で審議するよう指示した。」と⁽⁹⁾。オジェゴフは、ロジオーノフに対し、反論も交えながら率直で懇切な回答を書いている。その中で、「外来語選定の問題は、ロジオーノフ同志が考えているほど簡単ではない。一般的なことばや専門的なことばの中に出てくる膨大な数の外来語のうち、あ

れこれの観点から必要と思われるものだけを収録した。それぞれの単語を吟味し、辞書語彙におけるその比重を判定しなければならない。そこで、辞典編纂者は、常に、その可能な使用範囲を考えながら、必要かもしれない単語を削除するよりは、余分なものを収録する方を選ぶ。」と述べているのは興味深い。ちなみに、オジェゴフは、ロジオーノフの指摘で正当と認めたものには従い、例えば、эгрет, экзерция, антиципацияの3語は2版から削除している。

このほか、当時有名なマル主義者であったФ.П.Филин⁽¹⁰⁾も、オジェゴフ初版に対し、宗教的な単語の収録が多すぎると、悪意もあらわに書評している。2版に取り掛かっていたオジェゴフは、フィーリンの批判を避けて通ることはできず、新しい版のために準備された語彙項目の草稿をフィーリンに渡している。フィーリンは、これに対し、貴重なコメントや、見落とし、誤りを指摘しているが、オジェゴフの不屈の姿勢には不満で、ソヴィエトのロシア語辞典を作る必要性を再度説得しようとしている。宗教関係の語彙は、ギリシャ語由来の外来語が多く、それらを幾つか挙げてみる。フィーリンは、初版への書評の中で、апокалипсис, аналой, иеродиакон, фелонь等ギリシャ語由来の宗教関連語彙を、агитпунктやвоенкомとどちらが重要か、と、前者の削除を迫った。しかし、2版の草稿の中に、апокалипсис, аналой, иеромонах, иконостасが残っているのを見て、“これら単語の屍”の削除を再度強要している。その結果、オジェゴフは、2版で、апокалипсисとиконостасだけ残したが、他は削除せざるを得なかった。また、аристократияのオジェゴフ初版における語義“высший родовитый слой господствующего класса, дворянства”に対して、フィーリンは、аристократияの搾取的、寄生的性格を強調しなければならない、と、コメントしている。結果、オジェゴフは、2版の語義を“1. Высший родовитый слой господствующего эксплуататорского класса, дворянства. 2. перен. Привилегированная часть класса или какой-н. общественной группы.”とした。ちなみに初版の語義は：“1. Государственный строй в древности, при к-ром власть принадлежала богатым и знатным. 2. Высший, родовитый слой дворянства. 3. Привилегированная часть какой-н. общественной группы.”であった。ウシャコフ辞典は：“1. Государственное устройство, при к-ром власть принадлежит богатым и знатным (истор. полит.). 2. Высший слой дворянства, родовитая знать. Совокупность высших лиц какой-н. общественной группы, занимающих высшее, исключительное положение в своей среде.”としている。さらに、католицизмに

ついても、オジェゴフがつけた語義：「Христианское вероисповедание с церковной организацией, возглавляемой римским папой」は、「人民民主主義諸国のカトリック教徒が、人類の最も邪悪な敵であるローマ法王とのつまらぬかわりを絶ったことはよく知られているではないか。」と、フィーリンの烈しい攻撃を呼んだ。オジェゴフは、語義そのものは草稿のまま変えなかったが、用例でフィーリンの意向を受け容れ、2版には「К. - оплот реакции и мракобесия」を加えている。

このように見てくると、オジェゴフ初版に、異常なほど政治的な序文を書かせたのも、恐らく、当時の辞典学界におけるこのような状況であったことは、想像に難くない。

《注》

- (1) 1886～1942。カザン大学出身で、同大学、モスクワ大学等の教授を務めた言語学者。
- (2) А.М.Селищев; “Революция и язык”. М.1968参照。
- (3) 1950年6月20日付けプラウダに掲載された“言語学におけるマルクス主義について”で、スターリンが、「言語は常に階級的なものか」との質問に答えた中に、次のような記述がある：「.....これら（方言や隠語）には、一体何があるのか？貴族やブルジョア上層部の特別な趣味を反映する若干の特別な単語の寄せ集め、洗練されていること、丁寧なことを特色とし、民族語のうちの“粗野な”表現や言い回しを持たない若干の表現や言い回し、それから若干量の外来語である。しかも、基本的な単語、即ち大多数の単語と文法的構造は全国民的な民族語から採っている。従って、方言や隠語は、全国民的な民族語の分岐であり、言語としての自主性を失い、凍結の運命にある。.....」。また、「言語の特徴は何か」との質問に対する回答の中で、言語の交配（скрещивание）についてつぎのように述べている：「.....言語が交配する際には、通常、それらの言語の中の一つが勝者となって、その文法構造を保持し、その基本的語彙を維持し、その言語の発展の内的法則に従って発展を続け、かたやもう一方の言語は、次第にその質を失って死滅して行く。.....歴史的発展の過程で多くの他の諸民族の諸言語と交配し、常に勝者となってきたロシア語.....。ロシア語の語彙は、他の諸言語の語彙によって補充されたが、これは、弱体化したのではないばかりか、逆に、ロシア語は豊かになり、強化されたのである。」と。スターリンは、外来語の排斥を強調している訳ではない。しかし、無用の外来語排斥の傾向はその後も残っていた。オジェゴフ辞典2版に対する1953年発表の書評のうちにも、レーニンの“ロシア語浄化について”のメモを採り上げているものはある。
- (4) 1953年当時、アカデミー会員А.М.Терпигоревを委員長とするソ連邦科学アカデミー技術用語委員会が、専門用語整理の作業を進めていた。科学技術専門家たちの側からも、広い関心を惹き、必要にも迫られていた（А.М.Терпигорев: “Об упорядочении технической терминологии”. Вопросы языкознания, 1953, №1.参

照)。

- (5) Eに始まるロシアの単語は数少なく、ウシャコフ辞典で約9頁(240語)、オジェゴフ初版は4頁弱(見出し語数119語)を占めるにすぎない。そこに、ウシャコフ辞典は、多くの派生語を含め26の教会・宗教関連の単語を収録している(ギリシャ語の表記を持つのは、その中の10語)。オジェゴフ初版は、語群配置されているものを含め、その20語(ギリシャ語表記外来語は9語)を収録している。
- (6) オジェゴフのモスクワ移転は、Л.И.Скворцов: “С.И.Ожегов”, 1982.によれば、全ソポリシエビキ共産党中央委出版部の招きと、ウシャコフ辞典の促進に関する中央委Оргбюроの決定による、とある。また、オジェゴフの息子による父の思い出—С.Ожегов: “Отец”. (Дружба народов, 1999, №1)—は、「モロトフの個人的な裁量によって—誰がどのようにして、この指令を手に入れたのか判らないが、確認書まで残っている—、父は、Смоленский бульварの公共住宅に二部屋を取得し、ここに24年間住んだ」と述べている。ちなみに、モロトフは、当時、人民委員会議議長であった。後に、ウシャコフは、モロトフが、ウシャコフ辞典の作製を援助した事情を、プラウダ紙上に発表している—“Судьба одной ленинской идеи”. (Правда, 9 марта 1940г.)—。
- (7) 1935年12月17日および24日付けの二通の書簡。
- (8) この書評は、ウシャコフの歿後に発表されたものであったが、チルヌイショフは、自身が編集長を務めた17巻ものアカデミー辞典第1、第2巻の作業のためにも、先行のウシャコフ辞典を綿密に調べたとみえる。また、チルヌイショフは、オジェゴフ辞典初版が出版された時、オジェゴフ辞典を監修したオブノルスキーとオジェゴフのそれぞれに慶びの手紙を送っているが、その筆致の相異も、当時の辞典学界の模様を偲ばせるものであった。
- (9) О.В.Никитин: “Словарь русского языка С.И.Ожегова”. (Известия АН СЛЯ. 2000, №5)参照。なお、この指示に従ったのか、Рецензия.С.Крючков: “Словарь рус. языка.” Составил С.И.Ожегов. изд. 2. (Русский язык в школе, 1953.№2.)によれば、2版の原稿は、モスクワのソヴィエト地区第124学校のロシア語教師集団で検討されたとのことである。
- (10) フィーリンは、マル主義者の体質を保ったまましぶとく生き延びて、アカデミーの17巻もの現代標準ロシア語辞典では、С.Г.Бархударовのあと第6巻以降の編集長を務めた。1962年にはアカデミー準会員となり、1964～68年言語学研究所長、1968年以降1982年の死に至るまでロシア語研究所長、1971年以降は“вопросы языкознания”誌編集長でもあった。

(吉田衆一 日ロ関係史・第一教養部教授)